



都立立川国際中等教育学校附属小学校（2年目）

【校長】 市村 裕子
【児童数】 137名
【学級数】 4学級



次の取組へ

【課題・改善】

- ①現在、低学年児童しか在籍していないため、体育学習の中で ICT の活用場が学習カード・動画視聴に限られている。児童が自ら運動のポイントやコツへの理解を深められる学習資料として活用できるよう、体育主任中心に研究を続ける。
- ②第1学年の給食残食率が減少し、完食できる児童が増えてきた。バランスよく喫食できるよう、食の大切さのレクチャーや給食メニューの工夫をしていく。
- ③毎日朝ごはんを食べる児童の割合が令和5年度12月のアンケート調査では88%と低下し、ときどき食べない児童が12%と増えた。食育だよりや保護者会等で、保護者への啓発を継続し、児童本人がよりよい生活習慣への意識が高まるような授業や取組を増やしていく。

目標

- ・体育の授業が楽しいと思う児童（95%以上）
- ・全校児童の給食残食率の3%減少・毎日朝ごはんを食べている児童（100%）

【成果】

- ①「体育がとても楽しい」、「体育が楽しい」の児童の割合が、令和4年度12月実施のアンケート調査98%から、令和5年度12月実施のアンケート調査では、99%となり、学年が増えても、変わらず高い割合で推移し、児童は体育を楽しんでいる。また、柔道の動きを取り入れた授業では、道着の着方を互いに手伝ったり、教え合ったりする姿が見られた。
- ②多くの児童が元気におかわりする姿が見られ、学校全体の給食残食率が令和5年度6月の8%から12月は4%と4%減少し、目標を達成した。残食率が高かった第1学年の割合は、令和5年度6月の14.5%から12月には7%まで減少した。
- ③毎日朝ごはんを食べる児童の割合が、令和5年度6月のアンケート調査の結果は97%となり、都平均の割合94%を超えた。目標には達していないため、継続的な取組が必要である。

【実態・課題】

- ①児童が体育を楽しんでいるためには、「分かった・できた」という実感が大切である。めあてや学習課題を意識した運動と、活動の振り返りの充実が重要な課題である。
- ②学校全体の給食残食率が令和5年度6月は8%であった。第1学年の残食率の割合が14.5%で第2学年が1.5%であり、第1学年児童の食に対する意識向上が課題である。
- ③「毎日朝ごはんを食べる」児童の割合が、アンケート調査の結果、令和4年度は77%（10月）→100%（12月）と割合が高まったものの、通学区域が広く、登校時間を要するため、「早寝・早起き・朝ごはん」などの生活習慣の啓発は本校にとって継続的な課題である。

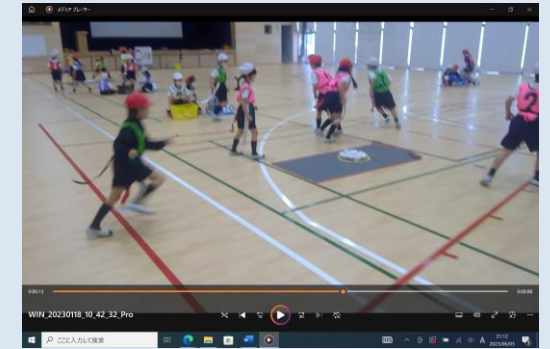
【取組】

- ①体育学習での取組
ICT機器の活用方法を精選し、めあてや学習課題に迫る話し合い活動や振り返りの充実を図っている。また、外部機関と連携し、柔道の動きを取り入れた運動遊びを行い、力強い動きを身に付けるとともに、相手を尊重する礼儀の精神を身に付ける取組を行っている。
- ②食育の取組
食育の指導及び担任と連携した授業をととして食の大切さを実感させたり、国際教育・国際交流プログラムで外国の料理を献立表に入れたりするなど、教育活動全体を通じて、食への興味をもたせる取組を行っている。
- ③生活習慣改善への取組
本校独自の取組として、長期休業期間に養護教諭が「元気アップカード」を全学年に配布し、児童と保護者で生活習慣に関わる目標を一緒に立て、成果を記録させる取組を行っている。

【取組（詳細）】

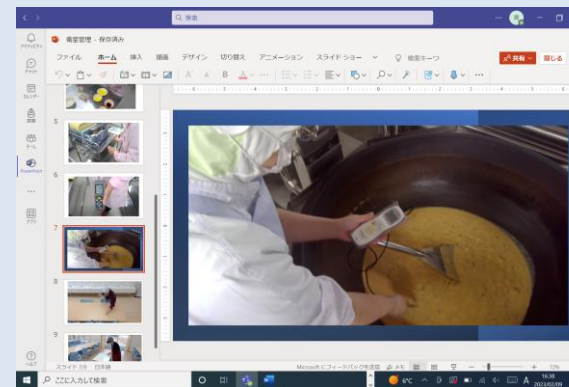
①大型モニターを活用した思考の育成

体育の学習で ICT 機器を活用することにより、運動の動画を必要な場面で静止したり、繰り返し視聴したりすることが可能となる。児童の運動場を教師がタブレットを活用して撮影し、本時のめあて・学習課題に迫る場面を児童が視聴する。例えば、鬼遊び「宝運び鬼」の単元で、攻め側が守り側をすり抜け、宝を取ることができた場面を見せる。「どうして宝を取れたのだろうか。」と問い掛けることで、児童が守りの動きに注目し、守りが他の所にいる間に宝を取りに行っていることを視覚的に捉えさせ、児童の思考を活性化させることができる。



「どうしたら宝が取れるかな」という課題に迫る場面を、大型モニターで視聴しながら思考を深める。

②ICTを活用した食育の指導及び授業の実施

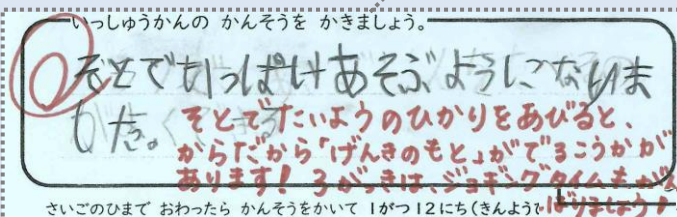
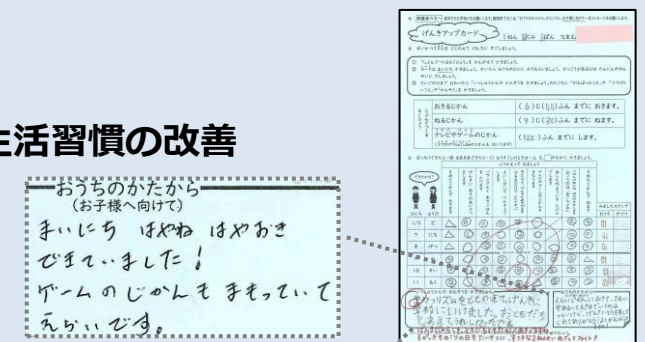


写真や動画を交えたスライドを工夫することで児童から自発的な問いや反応が見られる。

本校は栄養教諭が在籍しており、年間189日実施する給食で、毎回ICTを活用した5分間指導を行っている。また、年間を通じて6回（各学期に2回）、食育の授業を実施している。動画やスライドを活用することで、「食材はこのような風に栽培されているんだ。」「給食はこんな風に調理されているんだ。」と食に対する興味・関心が生まれ、今まで知らなかったことを理解したりできるようになる。食育の授業の際は、1人1台端末を活用して児童の考えを集約し、数値の視覚化を図っている。

③「元気アップカード」を活用した生活習慣の改善

本校は、通学区域が広く、登校時間を要するため、家庭と連携した「早寝・早起き・朝ごはん」のような生活習慣の確立は、児童の成長を支えるための重要な取組の一つである。養護教諭が中心となり、夏季休業期間及び冬季休業期間に、「元気アップカード」の取組を行っている。長期休業期間の終わりに、生活リズムを取り戻し、健やかな学校生活を再び始めることができるよう、起床や就寝の時間が適切か、バランスの良い朝食がとれたかななどについて目標を親子で決め、その成果を評価する項目をつくり、児童・保護者が取組を振り返る機会を設けている。



児童・保護者が取り組んだ「元気アップカード」の例。養護教諭が全てのカードを読み、家庭で生活改善に取り組める具体的なコメントを書いて返却している。